

四 新たな大学像の模索へ

1 飯島周学長の就任

平成六年（一九九四）十月二十二日、和田英道の任期満了による退任の後を受けて、学長に飯島周いたるが就任した。

飯島は、昭和五年（一九三〇）十一月長野県に生まれ、昭和二十八年（一九五三）三月東京大学文学部言語学科卒業、昭和三十年（一九五五）三月東京大学大学院を終えている。のち昭和四十三年（一九六八）四月、女子大学に専任講師として着任、昭和四十六年（一九七二）助教授に、昭和五十二年（一九七七）教授に昇格する。専門は言語学で、とりわけスラブ学の権威であり、チェコの作家カレル・チャペックの紹介者としても知られ、平成九年（一九九七）には、日本におけるスラブ文学の優れた業績に与えられる木村彰一賞を受けている。本学では英語学を中心とした講義・演習などを担当した。学長就任時は、女子大学に着任して二六

年目、六三歳の時であった。退任は、それまで十月であった学長の交代期を、大学暦にあわせるべく平成十年（一九九八）三月三十一日とし、その任期を終えた。

飯島周の学長就任時期は、すでに前学長時代からの懸案であった、臨時的定員増解消後の女子大学をどのようなものとするか、その将来構想の策定が具体的に問われ始めた時期に相当する。「過去の栄光を重んじつつ、新時代に遅れをとらぬよう進むべき道を開くこと」に、女子大学の将来の正否が掛かっているとの認識のもと、飯島が当面の方針として掲げた事項は、次の四点であった。

- (1) 短期大学部との共通点の拡大
- (2) 女子大学内の各学科の内容的再検討
- (3) 新学科・大学院の設置
- (4) 言語・文化に関する研究所、またはセンタ

1 の設置



これらの諸方針は相互に関連しており、総合的に進められるべきもので、もとより臨時的定員増解消後の女子大学の将来像と深くかかわっていた。また、これらは女子大学単独で実現可能なことではなく、とりわけ短期大学部との連携が不可欠であり、学園全体でのプロジェクトチームが立ち上げられることに繋がってゆく。

この間、女子大学では将来構想をにらみながら、大学入試センター試験の導入、花蹊記念資料館の開設、研究生制度の設置、情報処理教室の拡充など、さまざまな内部改革や整備が行われるとともに、飯島の提起は、学園全体のその後の発展へと継承されることになるのである。

2 大学入試センター試験の導入と 大学入試試験の多様化

とどまることを知らない一八歳人口の減少傾向のなかで、大学を取り巻く環境は、「大学が学生を選ぶ時代」から「学生が大学を選ぶ時代」へと急速に変容しつつあった。このような状況の変化に対応する女子大学改革の一環として、入学試験

の多様化が図られることになる。

平成七年度入学試験から、大学入試センター試験が導入された。これは過去数年を進めてきた入試の多様化の改革のなかでも、大きなものといえよう。

この前年度までの女子大学入試の種類は、海外帰国子女入試・社会人入試・編入試・学士入試の特別選抜入試、優先入試・公募推薦入試・指定校入試の推薦入試、そして一般入試であった。大学入試センター試験の導入は、一般入試のいつそその多様化を図ったもので、これによって一般入試の受験機会が増えるとともに、新たな学力の受験層の開拓、さらには書類応募のみによって全国のどこからでも受験することが可能となった。

平成七年度の一般入試の結果は、女子大学独自の学力試験であるA方式の志願者数一六九六名、大学入試センター試験を利用したB方式の志願者数一六九八名、合計で三三九四名に及び、前年度に比して一・八倍増となり、大学入試センター試験導入の成果は明らかであった。志願者数を地域別に見ると、北海道二五名、東北一四三名、関東二八八七名、中部二一九名、近畿二五名、中国三

大学案内の移り変わり(左から一九六五年、一九七八年、二〇〇三年度のもの)



○名、四国一五名、九州三六名、その他一四名となっている。志願者数はもちろん関東地域が最も多いが、志願者空白の地域はなく全国すべての地域で志願者数の増加がみられ、この面でも大学入試センター試験の導入は成功であったといえよう。

一般入試の改革をめぐっては、大学入試センター試験の導入後も、大学入試センター試験と面接とをセットにしたC方式の導入など入試の多様化に向けての努力が続けてきたが、平成十三年度には、あらたにA〇(アドミッションズ・オフィス)入試を導入し、再び大きな改革をはかることになる。

A〇入試は、本学への入学を強く希望する人物を対象とする入試である。具体的には、「跡見学園女子大学で学びたい」という強い意欲、「学部・学科の教育目標やカリキュラムの十分な理解」「入学後、何をどのように学びたいかの明確な目標」という三つの条件に合う受験生を対象

に、複数回の面談や課題レポートを課しながら、受験生各人の個性を丁寧に総合的に評価して選抜する入試である。

平成十三年度のA〇入試の募集人員は、四学科で四二名であったが、志願者数は九二名に及んだ。A〇入試の導入も、成功裡にスタートを切る事ができた。

志願者の確保は、私立大学の生命線でもあり、現在では、多くの教職員が、入試アドバイザーとして全国の高校等を訪問し、跡見学園女子大学のよさをアピールする努力によって支えられている。幸い、そのような高校の現場を知る努力が、高校側から求められている大学像への変革への重要な情報源となつてもいるのである。

3 花蹊記念資料館の開館

平成七年(一九九五)は、跡見学園の開学一二〇周年、女子大学の創立三〇周年に当たる年であった。これを記念して同年十一月、女子大学の新館(現二号館)内に、学祖跡見花蹊の名前を冠した花蹊記念資料館が開館した。オープニング・セレモニーの催された十一月十五日には、理事長はじめ



学園役職者、女子大学教職員が列席したほか、埼玉県内の美術館・博物館、高等学校、新座市からの来賓を迎え、式とテープカットののち、特別展観、ティーパーティーが和やかな雰囲気の中で行われた。

開館記念特別展は、「跡見花蹊とその時代」と題し花蹊の名品を一堂に会して行われ、学園内外の多数の入場者を得た。また、特別展の会期中には、開館記念講演会が開催され、山崎一穎の「明治文学と跡見花蹊」、青木茂の「日本近代の女流

画家と跡見花蹊」の講演があった。

翌平成八年（一九九六）十二月には、埼玉県教育委員会より博物館相当施設に認可され、公的にも認知された施設となった。

資料館には跡

見花蹊を中心に、その作品やゆかりの品々が收藏されている。特に、平成十四年（二〇〇二）と同十五年の二回にわたり、跡見純弘理事長より花蹊・李子の作品や学園の歴史に関係する多くの資料の寄贈を受け、收藏品も充実の度を加えている。

花蹊は幼少より勉学にいそしみ、成長して京都遊学の後は、父とともに大坂中之島、その後京都で家塾を営み、子女の教育にあたった。明治維新後は東京に出て、明治八年（一八七五）、神田中猿楽町に跡見学校を創設し、以後女子教育に邁進した。この間、花蹊はまた書画や漢詩文の研鑽も重ね、最晩年に至るまで教壇に立つとともに、絵筆を執った。

資料館では、教育者であると同時に芸術家、表現者としても高い評価を受けている花蹊の生涯と、跡見学園の歴史に関する資料を展示し、一女性の生き方とその教育理念、そして花蹊後の跡見学園、女子大学の沿革について理解が深められるようにしている。また、年に四、五回の企画展を開催し、花蹊の書画などの作品を中心に広く公開している。資料館は大学に開講されている学芸員課程の実習の場として活用されているほか、大学の共同教



育研究施設であり、大学構成員のさまざまな研究成果を発表・展示する施設としての役割も担っている。

資料館の役割はこのように多岐にわたるが、女子大学、跡見学園内の施設としてはもとより、企画展の活動などを通じて、広く社会に貢献できる施設としても充実の度を加えている。

4 山崎一穎学長の再就任

平成十年（一九九八）四月一日付で、山崎一穎学長が就任した。一〇年の歳月をはさんでの再就任である。

女子大学は、平成三年度から実施していた臨時的定員増は平成十一年度をもって終了し、その後の大学のあり方を考えることを迫られており、一方で、巨視的に眺めれば、短期大学部を含めて跡見学園の高等教育の方向をどのように定めるかが問われる時期を迎え、大学として学園として、重大な局面に立っていた。

社会に目を向ければ、一八歳人口は減少し、日本経済が右肩上がりであった時代は終わり、女子大生の就職は厳しく、実学志向は高まり、「国際化」

「情報化」が時代のキーワードである。本学においても、もはや、従来の文学部四学科体制で時代に対応することは困難であり、転換期を迎えているのは自明であった。こうした現実を前に、将来の展望への打開を、大学は再び山崎一穎に託したのである。

再び就任した山崎学長の指揮のもと、大学は新たな未来にむけて、大学の改組に取り組む。

山崎は、新時代の女性の多様な生き方と社会進出に向けたキーワードとして「ライフデザイン」を掲げ、具体的には、文学部との差異が明確な社会学部系の新学部を設置し、時代に応える学部教育の充実のためのカリキュラム改革として、情報処理や語学を重視し、性格の異なる学部間の共通科目を設置することに着手する。

こうした自己改革の間にも、平成十一年度には、前学長の時代からの課題である大学基準協会の相互評価を受け、その問題点をも見据えての将来改革を企画したのである。

大学を挙げての尽力は、やがて、平成十四年度にマネジメント学部の新設、文学部における、既存の四学科を統合した人文学科と、新たな臨床心

理学科の設置へと結実し、女子大学開学以来の改革によって新生跡見がスタートすることへと繋がるのである。

二学部三学科体制にともない、全学的最高意志決定機関として大学評議会が設置され、大学評議会の諮問に対応するために全学委員会が設置されることとなった。文学部・マネジメント学部教授会の主たる任務は教学面での対応が主となり、両学部にもたがる共通科目の運営のために全学共通科目運営センターが開設されたのである。

それは事務組織にまで及び、教務課と学生課を統合して学務部としたのをはじめ、新体制に見合う大幅な改変が行われた。

新たな教育課程の改訂では、広領域から自由に履修科目を選択できるよう特質化し、そのために、個々の学生の履修の指導援助を目的として、ほぼ全教員によるアカデミックアドバイザーの制度とオフィスアワーの時間が設置され、学生ひとりひとりにきめ細かく対応できるように配慮がなされることとなった。

新生跡見の開学は、再就任した山崎学長の二期目の開始にもあたる。新体制が軌道に乗り定着し

ていくなかで、高等教育のさらなる充実がめざされ、平成十七年度には、大学院人文学研究科日本文化専攻・臨床心理学専攻が新設されることになった。

5 新学部の設立構想

女子大学は、すでに述べたように、平成三年度から臨時的定員増を実施してきた。旧来の文学部四学科の定員は、一学年、各学科一〇〇人、四学科、四学年で一六〇〇人である。それが臨時的定員増により、一学年国文学科、英文学科は一八〇人、美学美術史学科、文化学科は一六五人、四学年で二七六〇人の学生が学んできた。この臨時的定員増は、平成十一年度をもって終了する。

文部科学省は、平成九年（一九九七）二月に、臨時的定員増終了後の大学の選択すべき方策を打ち出してきた。その一つの方途は、平成十二年度から同十六年度までの五年間で、臨時的定員増分を毎年度一〇％ずつ減員し、残りの五〇％を本来の定員に加えて恒定化するものである。つまり、一学年、国文学科、英文学科は一四〇人、美学美術史学科は一三二人、文化学科は一三三人、四学年

マネジメント学部開設した跡見学園女子大

大学 目指す進路へ実践積む

マネジメント学部開設した跡見学園女子大

就職重視カリキュラムに批判も

カギは実践と基礎の両立

跡見学園女子大は、マネジメント学部を新設するにあたって、就職に強い人材を育成することを目的としている。そのために、実践的なカリキュラムを重視している。しかし、一方で、基礎的な学問の学習が軽視されているという批判もある。

マネジメント学部は、経営学、マーケティング、情報システムなどの科目を学ぶ。また、企業でのインターンシップや、海外研修などの実践的なプログラムも豊富にある。これにより、学生は卒業時に即戦力として社会に出ることができるという期待がある。

しかし、一部の学生や教員からは、基礎的な学問の学習が軽視されているという批判もある。特に、英語の学習や、基礎的な経営学理論の習得が不足しているのではないかという声がある。

インターンシップも充実



マネジメント学部では、インターンシッププログラムが充実している。学生は、卒業前までに複数回のインターンシップに参加することができ、実際の業務を経験することができる。また、企業との連携も密で、就職先も豊富にある。

このプログラムは、学生が社会で必要なスキルを身につけ、就職に有利な立場に立つための重要な機会となっている。多くの学生が、インターンシップを通じて自分の進路を決めることができたと報告している。

で二一八〇人の学生総数となる。

いま一つの方途は、先と同様五年間で臨時的定員増分の五〇%を減員するが、残りの五〇%については本来の定員に加え、それを原資として、平成十六年(二〇〇四)までの間に、文学部の改組転換、あるいは新学部、新学科を設立してもよいというものである。臨時的定員増分の五〇%は、一学年一四五人、四学年で五八〇人となる。

ここに女子大学は、一体どのような道を選択するかの大変な局面に立たされることとなった。しかし、女子大学ではすでに将来構想のための委員会を、また学園レベルでもプロジェクトチームを立ち上げ検討しており、臨時的定員増終了後の女子大学構想に迷うところはなかった。日本社会の現状を直視したとき、文学部は本来の定員に戻し、一六〇〇人体制をとり、臨時的定員増分の五〇%に相当する一学年一四五人をもって、新学部を設立する方向に女子大学も法人も立った。そして、新学部は文学部との差異が明確かな社会科学系の学部を設置することで、大学としての広がりと、これまでとは志向の異なる学生層を受け入れることで、大学の充実をはかることとし、最終的にマ

マネジメント学部設置の具体化に向かうのである。

マネジメント学部は、従来の法学部、経済学部、商学部の学問体系を横断的、総合的に捉え、それを再構成して全く新しい学部として構想された。

そのマネジメント学部には、マネジメント学科を置き、履修モデルコースとして企業マネジメント、公共マネジメント、文化マネジメントの三分野を設けた。これらの三つの専門分野の体系的、複合的学修を通して、実社会に貢献できる女性の専門職業人の育成を目的としたのである。

6 文学部の改組と新学科の設立構想

女子大学の改革構想は、新学部設立にとどまるものではなく、文学部における従来の四学科の改組と、新たな学科の設立に向けても進められたのであった。

日本の大学の文学部は、設置以来、哲学・史学・文学を以て構成され現在に至っている。女子大学の文学部も、この三分野を基本として四学科を設置し、学問分野をカバーしてきた。しかし、近年の学問研究は、従来の学問分野の独立性よりも、学問分野を横断的に捉えることによって、新たな

研究の世界を開いてきている。複合的に対象にアプローチすることで、知の組み替えが行われてきているといえよう。このような状況下で、女子大学の文学部も、従来の四学科構成の見直しを迫られることになった。

また、受験生の関心の多様化も、文学部の見直しを迫る要素であった。文学部志望の受験生の目に、既存の四学科が魅力あるものとして映っているか、どのような学科が求められているかを、教員たちもまた考えるべき時代になっていたのである。さらに、現代社会が大学に求めているものとして、国際化に対応できる能力と、高度な情報技術を駆使する能力の育成がある。この今日的要請に応えることは、大学の使命である。

このような大学を取りまくさまざまな条件の熟慮のもとで、文学部の改組が決定されるにいたる。それは、従来の四学科を一学科に統合し、新たに人文学科を設立しようとするものである。

近年の社会的事件を見つめたとき、物質的豊かさや裏腹に、人間性の貧しさや行動の歪みが見えてくる。人間が人間としてどうあるべきかを、原点にかえって見つめ直す必要性のあることが痛感



されている。人間学としての文学部がカバーする学問領域は幅広い。そこで、これまでの四学科を廃止し、これらを横断的に組み替え、人間の精神活動の総体とその文化の総合的かつ有機的な教育・研究活動を目的とした人文学科の設立が構想された。その目標とするところは、急速に変化する現代社会のなかで直面する諸問題を解決するために、多面的な学修を通して、人間に関する総合的な深い知識と情報、状況を分析する能力を身に付け、現代社会に的確に対処しうる確固とした新しい人間性を育成することである。

学生たちが、さまざまな学問分野にわたって多彩に用意された科目群のなかから、一二の履修モデルを基礎に、自らの興味や関心に応じて、自由に履修科目を選択することができるようにした。個々の学生たちの学習目標に添えうる柔軟なカリキュラム編成を可能にすることによって、学生の興味や関心に添えようとする工夫を凝らしたのである。

さらに新世紀を生きる若者にとって、外国語と情報処理能力は、必要不可欠な技術である。この点の学修に関しては、設備を含めて配慮を加えた。また一方、人間学としての跡見の文学部の再構築にあたり、浮上してきたのは、人間の心を問題にする領域の学問の重要性であった。その結果、新たに文学部に、心理学系の学科を設置することとし、具体的な社会的要請に添えるために、スクールカウンセラーの養成をめざす臨床心理学が増設されることとなったのである。いじめ、不登校等の児童生徒の問題行動が、大きな社会問題となつている日本社会の現状を真摯に受けとめたと、子どもたちの問題行動の未然防止や、早期発見のための心の相談にあたるスクールカウンセラ

の育成はきわめて差し迫った課題である。臨床心理学は、まさにこのような社会の求めに直接応えてゆこうとするものであり、入学定員一〇〇名の純増が認められ、新学部と同時に開設の予定で準備が進められた。

7 文学部・マネジメント学部の開学

あらためて大きく振り返れば、昭和から平成へと世の中が変わり、女子大学をめぐる状況も変容してきた。女性の生き方は多様化し、社会に進出して活躍する女性たちもふえた。昭和六十年（一九八五）五月には、男女雇用機会均等法（雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律）が成立し、翌年四月一日から施行され、さらに、平成九年（一九九七）には、同均等法の抜本的見直しが行われ、平成十一年（一九九九）四月一日から施行されるにいたる。同年には、男女共同参画社会法も成立する。一方、大学進学率が上昇し、少子化は深刻な社会現象となる。大学のユニバーサル化が進み、受験生の減少が危惧され、大学のあり方そのものが問われる時代が到来したのである。

折しも、世の中は、二〇世紀から二一世紀への転換点を迎える。昭和四十年（一九六五）に開学した跡見学園女子大学は、三〇年をこえる歳月を経て、古き伝統の尊重から、新たな時代の要請にこたえる大学への改革を迫られたことになる。

男女雇用機会均等法が施行され、男女共同参画社会の構想も話題にのぼるようになっても、現実の社会は、すぐに大学を卒業したばかりの女性を受け入れるというわけではない。いまだ脆弱な現実社会に、認められる女性を育て、送り出せる教育と設備を提供する大学像が模索されていたのである。

平成九年から、跡見学園における高等教育の将来のあり方についての検討、二一世紀へ向けての新たな展開のための、平成十一年度の自己点検、自己評価を試み、その客観的評価のための大学基準協会の相互評価など、新世紀を担う女性の育成をめざして、大学の充実がはかられてきたことになる。

そうした時代の要請が、平成十四年度の第二の開学ともいべき跡見学園女子大学の大幅改革をもたらす。文学部を単科大学から、二学部三学



科の総合大学へと変貌を遂げるのである。実社会に直接的に貢献できる女性を育成するための社会科学系学部として、マネジメント学部が創設され、

文学部の既存四学科の人文学科への統合、さらにスクールカウンセラーの養成をめざして臨床心理学の増設に結実することになる道筋は、既に述べたところでもある。

かくして、文学部は、神野藤昭夫を学部長とし、定員四〇〇名の人文学科は、平成十三年(二〇〇一)三月三十一日付で文部科学大臣に申請し、同年五月二十九日付で設置が認可され、定員一〇〇名の臨床心理学も、同年四月二十七日付で申請し、八月一日付で設置が認可された。また、マネジメント学部は、山本貞雄を学部長とし、定員一九五名、三年次編入一〇名のマネジメント学科を同年四月二十七日付で申請し、十二月二十日に認可されることとなったのである。

ここであらためて、両学部の三学科について、述べておこう。

(1) 文学部人文学科

文学部は、従来、諸学問分野が独立してあったが、諸学問を横断的にとらえられる知の組み替えをめざしている。また、入学時の一八歳で人生を選択することは、必ずしも容易ではなく、現実に



見合っているとはいいがたい面がある。入学時にすべてを決定するのではなく、ひとりひとりの学生が、大学で学ぶことをおして「自分探し」を試み、自己にもっともふさわしい生き方を描けることが、目的となる。「ライフデザイン」が、新入生跡見学園女子大学のキーワードとして、謳われるのである。

また、国際化・情報化の現代社会にあつて、文学部においても、語学力と情報処理能力が求められるのは当然であり、それは必須教養として学べるよう、設備面の充実とともに考慮されている。

人文学科は、広い領域を横断する学科として開設され、それをよりわかりやすくするために、一二の履修モデルが設けられた。すなわち、日本文学、英米文学、比較文学、文芸ライティング、言語コミュニケーション、思想表現、文化史、現代社会、芸術芸能、美術史、造形表現、メディアコミュニケーションがそれぞれである。しかも、これら一二のなかから一つだけを選ぶのではなく、多彩な科目から、自分の興味や関心に見合った科目を自由に選択し、自らカリキュラムを編成できるのが特徴である。一年次でさまざまな分野を学ぶこ

とをおして、自己の個性や方向を見出し、二年次からは、それぞれに適したコースを中心として広く人文学科の諸分野を学ぶことができる。こうしたカリキュラムは自由な部分が多い分、各個人がカリキュラムを組むうえで、よりよい選択と判断をするために、アカデミックアドバイザー制度が新たに設けられ、学生ひとりひとりに、アカデミックアドバイザーの教員が付き、相談にのり、懇切ていねいな対応が可能となるよう、細心で万全の配慮がなされている。なお、アカデミックアドバイザー制度は、臨床心理学科、マネジメント学部においても同様に導入され、女子大学のきまやかな学生指導の特色となっている。

(2) 文学部臨床心理学科

臨床心理学科は、いじめ、登校拒否等の社会問題を正視し、こうした問題を抱えた子どもたちへの対応はもとより、そうした問題を未然に防止し、早期に発見できるような援助活動を行える、スクールカウンセラーの養成をめざしている。実践性と科学性の統合をテーマとして、その教育課程が検討され、スクールカウンセラーの養成、研究能力育成、実習科目・演習科目の充実、多彩な隣接



領域科目の配置、資格取得、などをそれぞれ意識した課程編成となっている。

さらに実習にあたっては、地域との幅広い交流が求められ、地域に生きる大学として、根を張ろうとしている。

また、臨床心理学の開設にともない、大学の附属施設とし

て、キャンパス南側に、心理教育相談所が開設された。延床面積は約二六〇平方メートル。実験室・実験準備室、実験観察室・実験観察準備室、相談室A、B、Cに、演習室、待合室、事務室が設けられている。これは、広く学外一般からの、心理教育に関する相談を受け付け、援助する施設として活用されており、二〇〇二年度から『心理教育相談所報』を発行している。

(3) マネジメント学部マネジメント学科

マネジメント学部は、従来の法学・経済学・商学の学問体系を、横断的、総合的にとらえ、それをシステマティックに構成しなおした学部である。履修モデルコースとして、企業マネジメント、国および地方公共団体のマネジメント、文化事業のマネジメントの三コースを設け、それらの体系的、複合的学修をとおして、実社会で活躍できる女性の育成をめざしている。

開学を前に平成十四年(二〇〇二)一月二十六日には、茗荷谷の跡見小講堂において、「21世紀を生きる女性とマネジメント」と題して、シンポジウムが開催された。学長山崎一穎を司会に、ニュースキャスターとして知られる福島敦子、株式会



跡見学園女子大学シンポジウム「21世紀を生きる女性とマネジメント」



新聞記事にとりあげられた有限会社ハイカラ

社ジェイ・ボンド社長で経営コンサルタントの齊藤聖美、政策研究大学院教授で当時本学の客員教授であった大田弘子をパネリストに迎え、社会で活躍する女性の体験にもとづく、現代社会におけるマネジメント能力の必要性について、活発なディスカッションが展開され、朝日新聞にも掲載された。

マネジメント学部では、インターシップを二年次の全員必修として単位を認定し、社会で活躍する女性たちを講師に招いてキャリアデザイン講演会を行い、早くから、社会を知り、学生自身のキャリアアップを考える機会を多く提供している。また、蓮見徳郎をはじめとする教職員の後援により、学生たちが自分たちの手による有限会社ハイ

カラを設立、経営が試みられ、マスコミでも話題となった。マネジメント学部は、現実社会との交流なくしてはその特質を生かすことができない学部であり、このような学部の設立は、大学全体に、幅広い活性力を与えることに繋がっている。

かくして、開学記念式典は、平成十四年五月十一日に新装なった花蹊メモリアルホールにて挙行されたのであった。

8 花蹊メモリアルホールと三・四号館の完成

このような大学改革は、それに対応する校舎・施設なしには実現しない。

新設のマネジメント学部の新設には、新たな校舎が必要となり、新学部棟が建設されることになった。正門を入って左手、キャンパスの川越街道沿い、かつてバスの車庫として利用されていた六〇〇〇平方メートルの場所が、その用地として当てられた。

新学部棟の着工は平成十二年(二〇〇〇)十一月九日、平成十四年二月二十八日に工事を終え、竣工式は同年三月二十三日に行われた。設計は日本設計、建設は鹿島建設。新校舎は、教室棟、研究棟、視聴覚棟の三棟から成り、これにより、教室棟を三号館、研究棟を四号館、視聴覚棟は花蹊メモリアルホールとそれぞれ名づけられた。

三階建ての教室棟は建築面積八一九・九一平方メートル、延床面積二三四二・〇四平方メートル。一階には、定員一三〇名の大教室が二室と情報メディアセンターのコンピュータ室、機器室、事務

室等を配置。二階は、大教室一室の他、六〇名定員の中教室が二室、三〇名定員の小教室が三室、三階は、中教室二室と小教室六室が配置され、教室はいずれも最新機器設備を活用できるように、配慮されている。

五階建ての研究棟は建築面積五五〇・六九平方メートル、延床面積二四五三・二五平方メートルで、一階には、非常勤講師室とコモンルームがある。コモンルームは、教員相互の交流・研鑽を図る場となり、昼食時には教職員食堂として利用されるほか、諸会合・打ち合わせ等に使用されている。二階には、八〇名収容で三つに仕切れることも可能な大会議室と応接室、マネジメント学科研究室があり、大会議室は、平成十四年度より新たに開かれるようになった全学教授会や、文学部教授会に用いられている。三階から五階までは、教員の個人研究室で、各階一〇室ずつ計三〇室がある。これらは、二号館の文学部教員個人研究室と、同じ規格となっている。

花蹊メモリアルホールは八二〇・二八平方メートルで、四〇〇人収容の視聴覚ホールである。これは、すでに設置されている図書館視聴覚ホール、

花蹊メモリアルホール(右手)と四号館(左手)



花蹊メモリアルホール内部



二号館視聴覚ホールより大規模であり、平成十四年五月十一日に開催された「跡見学園女子大学文学部・マネジメント学部開学記念式典」も、新生跡見学園女子大学の出発にふさわしい、この花蹊メモリ

アルホールで举行された。以後、このホールは、新時代を迎えた女子大学の各企画や講演会等の会場として、広く活用されている。また、ホールに隣接する大階段は、三・四号館のエントランスを明るく印象に彩っている。三号館脇には、一〇〇台収容可能な駐輪場も設けられた。

新学部創設にともなう新学部棟の建設により、大学正門の門柱・門扉が新設され、ロータリーの景観も改められた。舗道と車道が区別され、門衛所も新たに建て替えられ、学バスの乗降場所は、一号館正面玄関前から、花蹊メモリアルホール前に移された。また、ロータリー内の植え込みには、平成十三年度卒業生から寄贈された、桃四本と李三本が植えられた。学祖跡見花蹊にゆかりの、史記の一節、「桃李言はざれども下自ら蹊を成す」を、意識した趣向である。

9 大学院の開設

地域に根ざした大学として、あくまでも学部教育の充実に重きをおき、大学院を置くことには慎重であった女子大学も、このような学部の充実発展のうえに平成十七年度、ついに文学部に男子学



生をも受け入れる大学院を開設するに至った。中谷幸弘を研究科長とする人文科学研究科の設置認可申請は、平成十六年六月三十日付で文部科学大臣中山成彬に提出され、同年十一月三十日付で設置の認可が下りた。

日本の高等教育においては、今日、進学率の上昇によって大学の大衆化、ユニバーサル化が進展してきている。またその一方で、高度化、複雑化する社会に貢献しうるような、より高度で専門的な教育研究体制の確保・拡充も大学に求められてきている。このような大学を取り巻く社会環境のなかで、女子大学では学部教育の基礎の上に立ち大学院の開設を実現したのである。

人文科学研究科は、文学部人文学科を基礎とする日本文化専攻、および文学部臨床心理学を基礎とする臨床心理学専攻の二専攻を設置した。マネジメント学部でもまた、同学部を基礎とした研究科の設置を予定しており、将来的には博士課程（後期）も設置することを視野に入れ、それにふさ

わしい教育研究環境を整備してゆく計画である。

人文科学研究科日本文化専攻では、思想、芸術、民俗・社会、文学の四領域の研究を中心に、古来からの伝統文化の継承と新たな外来文化の受容との関係に関する総合的な探求を進めながら、日本文化の構造、特質と、その歴史的意義などを研究している。そのことを通じて、社会の諸分野において日本文化の進展に貢献できる高度な知識と教養をそなえた人材を養成するとともに、博物館・美術館・資料館等の社会教育施設、官庁、民間企業、NPO法人等、日本文化にかかわる分野において指導的な役割を果たし、外国との文化交流に携わることのできる高度な専門職業人の育成をはかっている。またあわせて、研究活動をさらに深化させ博士後期課程への進学を志向する者の指導も行い、日本の学術研究の将来を担う世代の育成もはかっている。

一方、人文科学研究科臨床心理学専攻では、臨床心理学と、その関連学問領域における実践的な教育と研究を通じて、人間のより深い本質をわきまえ、悩みを抱えた人間を受容できる職業人としての、自立した心理臨床家の育成を目的とする高

度な専門教育を行っている。本専攻の修了者は、臨床心理に関する専門的な能力や資格を有する者として、スクールカウンセラーなどをはじめ、現代社会におけるさまざまな局面で重要な役割を果たすものと期待されている。

大学院の開設は、地域の要請にも応えるものである。埼玉県内にキャンパスをおく既存の大学院に開設されている研究科または専攻の分野をみると、理工系や社会科学系の研究科は充実しているものの、人文科学の研究科、特に日本美術に関する科目を配している日本文化専攻は稀少なものといえる。本専攻の開設によって、地域社会に対してこれまで女子大学が提供してきた学部教育や公開講座に加え、より高度な教育研究を提供することが可能となった。

埼玉県では現在、心の問題をめぐって、文部科学省の施策によるスクールカウンセラーの他に、「さわやか相談員」の配置や「心の教育相談室」「教育相談所」の設置を積極的に進めている。また、新座市では不登校児童生徒や集団不適応児童生徒の心のケアと学力の定着や、人間関係作りのスキルアップを目的とし、学生を「ピアサポーター」

として学校・家庭等に派遣している。これらの自治体の活動は、臨床心理士の資格を有する心理臨床の専門家の養成を急務としており、女子大学に開設された臨床心理学専攻に対する期待には大なるものがある。

10 現在そしてさかんなる明日へ

開学四〇周年にあたる平成十七年(二〇〇五)春、女子大学は、新一年生八五三名、編入学生四六名に加えて、新たに設置した大学院人文科学研究科の院生二三名を迎えた。

平成十七年度は、現代社会の要請に応えるにふさわしいスキルとマインドを持った学生の育成をめざした、平成十四年(二〇〇二)の大学改革から四年目。文学部人文学科・臨床心理学科、マネジメント学部マネジメント学科からなる新生跡見の体制が完成する年である。その高等教育機関としての構想は、さらに高度の専門的で洗練された学の育成をめざした大学院人文科学研究科の開設に繋がり、その実現をみた春でもあった。

平成十七年四月一日の跡見学園女子大学全学教授会の席上、学長山崎一頼は、三月二十三日に開



催された第三二〇回理事会、第二七七回評議員会において、平成十八年度四月一日より跡見学園女子大学文学部にコミュニケーション文化学科を、またマネジメント学部对生活環境マネジメント学科を設置することに伴う、学則改正ならびに学校法人跡見学園寄附行為の一部変更に関する件が審議され、その承認が決議されたこと、それは、同時に、平成十八年度四月一日より短期大学の学生募集を停止する案件と連動していること、を報告した。

これは、平成十四年の改革以来、跡見学園の高等教育のありかたについて検討を重ねてきた結果であり、大学と短期大学部を一体化し、学部教育のさらなる充実をはかることが望ましいとする合意を意味する。それは、茗荷谷（大塚）キャンパスと新座キャンパスとを相互に有効活用することによって、跡見学園の高等教育の促進と活性化をはかるうとするものである。

文学部コミュニケーション文化学科は、入学定員九〇名。母語である日本語を中心として、多文化を理解する力、さまざまな他者と共生するコミュニケーション能力を養うことを目的とする。ま

たマネジメント学部生活環境マネジメント学科は、入学定員八〇名。個人の生活と家庭を中心とするプライベートな領域をパブリックな環境論的な視点から捉え直すことによつて、生活環境をマネジメントする実践的な専門的知識や技術を体得させることを目的とする。

かくして、両学科は、四月五日文部科学省に設置届出書を提出した。

また、これにともない、他の学科の入学定員の変更を、四月二十八日に文部科学省に申請し、人文学科三六〇名、臨床心理学科一二〇名、マネジメント学科二一五名とすることとなった。

さらに、マネジメント学部を基礎とする大学院マネジメント研究科が、平成十八年四月、茗荷谷キャンパスにおける開学をめざして準備が進められている。

これらの跡見学園の高等教育は、茗荷谷キャンパスと新座キャンパスとの一体化を促進するものであつて、平成十八年度からのマネジメント学部の入学生は、三・四年生になると、茗荷谷キャンパスで授業をうけることになる。このような組織改変にともない、平成十八年度入学生からは、教

育課程も新たなものとなることが予定されている。昭和四十年（一九六五）の跡見学園女子大学の開学の日から四〇年。女子大学は、その伝統の重みを深く継承しつつ、過去に甘んじることなく、新たな再生の努力を続けることで、今、さらなる飛躍の時代を迎えようとしているのである。